

アクティブラーニング計画構築と授業運営 — 双方向コミュニケーションによる主体性の育み —

Active-learning Program Establishment and Lesson Management — Cultivating a Sense of Identity through Interactive Communication —

林 勇人*・小栗雅子**・山本麻衣***

Hayato HAYASHI, Masako OGURI, Mai YAMAMOTO

要約

基礎教育科目担当教員、専門科目担当教員及び助手という異なる立場にある3者が、それぞれ双方向コミュニケーションに重点を置きながら、アクティブラーニング授業を計画した上で実践した。またこの実践の開始前後において、本学における学士力を示す「4つの力と11の要素」の評価指標を用いてアンケート調査を行い、その変化から、短期大学栄養士養成校における組織的なアクティブラーニング計画構築の在り方と実践の効果が認められたので報告する。

Abstract

キーワード:

アクティブラーニング・授業運営・コミュニケーション力・主体性

I. はじめに

平成24年8月の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」を契機として、大学教育の中身は大きな転換期を迎え、教員側の一方向的な講義から生まれる学生の受動的な学習ではなく、教員と学生が意思の疎通を図りながら学生自らが主体的に問題を発見しその解を見出していく、能動的学修(アクティブ・ラーニング、以下ALと表記)への転換¹⁾が求められている。このような流れの中でさらに本学では、地方にある短期大学栄養士養成校として、ユニバーサル化における学力格差、目的意識やコミュニケーション力の欠如した学生増加等の課題を抱え、早急に組織的な能動的学修への転換を図り、学生にとって有意義な学修となるように、質的転換を進めなければならない現状にある。

林・谷口(2010)によると、多人数授業の場合、その多くが教員からの知識教授のみの一方向の講義形態が多く、このような講義では、教員か

らの発問に対しても学生からの積極的な反応は期待できない現状を述べている²⁾。そこで、教員・学生間のコミュニケーションの活性化を図る、メールやツイッターを活用した新たな授業の在り方を、ワークショップ型のFD研修を実施して検討している。授業改善を目指した工夫として取られた教員アンケートの結果では、学生とのコミュニケーションを図るために、リアクションペーパー、メール、携帯、学習支援システム、LMSの活用等が示されていた。このことに対して「大学での学習支援システム、LMSなどITCを利用したケースが目立った。しかしその利用の多くが学期毎の一過性のマネジメントに関する利用が多い」と述べている。また「対面に比べメールやメディアを介したコミュニケーション活動の限界を指摘しており、現行での多人数授業でのアクティブラーニングの限界を感じている」とした。

また武田(2015)によると、ALの推進が拡大する中で、どのような教材開発を進めればよいの

*本学教授, **本学准教授, ***本学助手

かが課題となっており、その解決策を得るためにAL推進に関するFD研修モデルを設定し、アンケート分析からAL研修方法のあり方を検討した³⁾。その結果として、ALの実施に対する否定的な感想はほとんどなく、概念的な内容理解よりは「具体的な授業実践例を提示し、その中からALの要素を抽出すること」および「体験を重視した研修要求が強いこと」が理解できたとした。さらに、教員はALについておおよそ理解しているが、どの程度まで行えばAL型授業になるのかの判断ができずにいる状況が伺え、その対策として「(1)各大学がALの位置づけに関するFD研修をすすめる、教員および組織内の合意形成を図ることが必要になる。(2)大学独自に共通の学習指導案を作成して、ALの事例集とすれば、大学の貴重な資源になると共に、ALの推進につながるため、具体的な実践例の提示が必要である。」と示した。

以上のような点から、多人数授業における知識教授のみの一方向の講義形態及びITCを利用したコミュニケーション活動では、学生の積極性や主体性を育むのには限界があるといえる。そしてこの限界を打破する方法としてAL型授業の展開が考えられるが、この推進にはFD研修を通じて教員及び組織内のAL型授業への合意形成を図ると共に、具体的な授業実践を積み重ね、実践例の提示を行うことが必要であることが分かる。このような点を踏まえて、本研究では本学におけるAL型授業の計画構築後、その実践をすることにより、学生の主体性を引き出す新たな方法を提示し、AL型授業の推進につなげていきたい。

尚、アクティブラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」⁴⁾ものとする。

II. 目的

本研究では、基礎教育科目「日本語表現」担当

教員、専門科目「栄養学各論実習」担当教員及び助手という異なる立場にある教員が、それぞれのAL型授業を計画した上で実践し、その振り返りを通じて効果を検証し、短期大学栄養士養成校における能動的学修の計画構築及び、授業運営の効果的な在り方を確立していくことを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象

中京学院大学 中京短期大学部
健康栄養学科1・2年生

2. 場所

中京学院大学 瑞浪キャンパス内 7号館教室

3. 期間

平成28年4月～8月

4. 調査方法

AL型授業実施の前提条件である、教員と学生との関係性の構築と自由に発言できる雰囲気を醸成する為に、「先手の挨拶」「名前と呼ぶ(名前と顔の一致)」「アイコンタクト」「傾聴の姿勢を大切にする」の4点を共通の教授姿勢として実践する。

また、「日本語表現」では、ブレインストーミング、KJ法、ペアインタビューに基づくスピーチ、ミニッツペーパーによる振り返り、「栄養学各論実習」では、詳細シラバスの運用、実習レポート作成、班編成の工夫、授業姿勢チェックの実践に取り組み、双方向コミュニケーションに重点を置いたAL型授業を行う。

そして、このような実践の開始前後において、本学の学士力を示す「4つの力と11の要素ルーブリック」を活用したアンケート調査を両科目において実施し、数値の変化からAL実践の効果を検証する。また共通の教授姿勢の評価としては、ミニッツペーパーや授業アンケートのデータ及び、先のアンケートから得られた主体的な学習姿勢の情勢に着目して検証する。

5. 倫理的配慮

アンケートは研究等の対象者となる個人の人権擁護の為に無記名で行い、個人が特定されないように配慮した。またアンケート用紙には研究の概要、個人情報の保護に関する事項、インフォームド・コンセントに関する事項を設け、それぞれについて口頭で説明しながら、同意するか否かを選択できるように配慮した。

6. 実践内容

本研究では、異なる立場の教員がそれぞれ双方向コミュニケーションに重点を置きながら、AL型授業を実践した。また、前述したように講義開始時において、AL実施の前提条件である、教員と学生の関係性の構築と自由に発言できる雰囲気醸成する為に、「先手の挨拶」として、学生より先にいつも笑顔で挨拶することや、適切な言葉かけをすること、「名前と呼ぶ(名前と顔の一致)」として、一人ひとりの顔と名前を一致させて名前と呼ぶことで学生を尊重しながらコミュニケーションを取ること、「アイコンタクト」として、学生一人ひとりの顔を見て、各人と目を合わせながら進行すること、「傾聴の姿勢」として、学生の質問や疑問をしっかりと受け止めることの4点を3人の共通の教授姿勢として実践することを確認した。

その後、各教員におけるAL型授業の設計及び実践を行った。

基礎教育科目担当教員は「日本語表現」の講義で、「日本語の特色」「書いてみよう」「話してみよう」の3単元の最初の講義にALを取り入れた。具体的内容は、これまで講義形式で各単元の目的や課題について教員が一方的に説明していたものを、5、6人のグループを作り、主にブレインストーミング、KJ法を用いて、学ぶ目的や課題を学生達で考え、発表する形を取り、各単元の動機付けを明確にして、学生の主体的な学びにつながるように配慮した。例えば最初の「日本語の特色」の単元では、「日本語の特色は何か」「自分たちが課題としている点は何か」をテーマに掲げ、

各グループで付箋を利用してブレインストーミングで意見を出し合い、模造紙に付箋を貼りながらKJ法で整理、グルーピングした後、各グループの代表が意見を発表した。また各単元において、ペアで簡単にできるワークを取り入れ、他者とのコミュニケーションを通じて多様性を認め合い、自己の役割認識を高められるようにした。例えば「話してみよう」の単元では、「ペアインタビューに基づくスピーチ」を行った。これはペアを組んだ相手のテーマに基づいた話を聞き、インタビューシートを用いて話の要約、自分の意見、気づき、疑問点等を聞き取った後、各自がそのまとめを発表するものである。さらに、AL型授業に関わりなく全ての講義の終了時には必ずミニッツペーパーを配布し(表1)、①講義の重要点、②講義内容の理解度、③主体的に行動できたか、④疑問点及び質問事項、要望等を学生から聞き取り、次週の講義開始時に全員に教員コメントを記入して返却する形を取った。このことにより教員と学生の関係性構築を図った。

次に専門科目担当教員は「栄養学各論実習」で、詳細シラバスの運用及び実習レポート作成を取り入れたAL型授業の設計と運営を実践した。詳細シラバス(表2)については、第1回目の授業ガイダンスで配布し、説明する時間を設けた。これは入学時に配布されたシラバスの項目に、授業方法、授業計画、時間外学習に関わる情報、成績評価方法、修得できる力、受講ルール、オフィスアワー連絡先を加えて記し、このシラバスの活用により、学生の学修を促進することが出来るよう配慮した。

実習レポートは、授業が鳥瞰できることを目的に、半期授業レポートを第1回授業で全て配布した。このレポートは予習部分、実習、まとめの形式になっているため、気づきや疑問を振り返る時間が必要となる。これによって自然に予習を行い授業に参加する習慣が生まれ、聴き方に積極性が加わり、学びの意識づけになると考えた。授業はグループで学生を中心に行う方法とし、知識だけでなく他者とのコミュニケーションの図り方、多

表1 日本語表現で用いたミニッツペーパー

中京短期大学部 <u>Minute Paper</u>	
日時:	年 月 日 曜日 限
科目名:	
教員名:	
学籍番号:	
氏名:	
1.	今日の授業で最も重要だと思ったことは何ですか
2.	今日の授業の内容は理解できましたか (該当の箇所に○を付けて下さい)
	① 十分理解できた ② ある程度理解できた ③ あまり理解できなかった ④ 全く理解できなかった
3.	今日の授業に対する疑問や要望があれば記入して下さい。
4.	今日の授業は主体性を持って行動できましたか (該当の箇所に○を付けて下さい)
	① 十分できた ② ある程度できた ③ あまりできなかった ④ 全くできなかった
5.	教員からのコメント

様性を学べる構成とした。さらにグループで実習の予習やまとめを発表する仕組みを設けた⁵⁾。

また、授業開始時に前回授業の振り返りを行い、学生の気づきを発表することや、疑問及び質問に答える機会を設けることで、全員が情報を共有できるように配慮した。

専門科目担当助手は上記の「栄養学各論実習」に関わる中で、班編成の工夫と授業姿勢チェックを取り入れた。編成方法としては、1年次後期の「給食管理実習」の学業成績、提出物、出席状況及び助手として携わる中で観察してきた実習記録に基づき、できるだけ多くの者との関わりが持てるように、毎時間異なるグループ編成を行った。

編成方法としては「調理技術が高い学生」又は「指導力がある学生」、「技術、指導力共に中間層の学生」、「調理技術が不足する学生」又は「コ

表2 栄養学各論実習詳細シラバス (一部抜粋)

栄養学各論実習詳細シラバス		
《授業を通して修得できる力》 思考力：リフレクション力、計画性、創造力 行動力：挑戦力		
《授業方法》 ・事前に当該部分の予習を行い、事後は復習課題を行う。 ・本授業では、事前課題、実習内容、振り返りについて、一部学生講義を取り入れる。 ・体験的に学ぶことを目的として、グループワークをはじめとする相互学習形式で、積極的な授業参加が求められる。また、小テストを実施し理解度を確認する。		
《授業計画》 授業は原則下記にしたがって進める。 変更がある場合はあらかじめ知らせる。 ・事前課題：レポートについて、該当教科書ページをよく読み、分からないことについて質問できるよう準備する。 ・振り返り：毎回、開始時に前回授業で何を学んだか、振り返りを行う。		
項目	内容	○事前課題 ■事後課題
第1回	オリエンテーション 本授業の理念を理解し、受講生が学び獲得すること、期待される知識・技術および授業方針について知る。 講義と実習 調乳することができる 各種調乳製粉乳の違いを理解する	■調乳における衛生、調乳の種類と違いをレポートにまとめる。 課題：1,2,3,4 問題を解く
第2回	講義と実習 離乳食が理解できる ベビーフードの食味、活用方法を理解する	○課題：1,2,3 ■課題：4,5 問題を解く
《授業の注意事項》 《レポート作成上の注意》		

ミュニケーション力が低い学生」を均等に割り当て、調理時間や実習への取り組み意欲の格差防止、学生間での問題解決力向上を図った編成となるように配慮した。

授業姿勢チェックでは、毎時間実習前に授業参加に対する姿勢を図るため、事前のチェックを行った。内容としては、従来から行われている「身なり」と「衛生」チェックに加え、専門科目教員が設定した「予習課題の実施状況」チェックを行った。これにより、学生自身の衛生管理や授業への目的意識が構築されると共に、実習前に対面式の関わりを持つことにより、教員と学生の関

係性をより強固に構築し、学習への動機づけを図った。

IV. 結果

「日本語表現」の講義では学生を対象としてループリックを活用したアンケートを初回と最終授業時に行った。コミュニケーション力の項目である、「規律性・傾聴力・フレンドシップ力」について、それぞれレベル1、2、3を回答する形を取った。挨拶、言葉遣い、時間管理能力、ルールを守る等を表す規律性では、講義開始時レベル1と自己評価した学生が27%、レベル3は19%、終了時にはレベル1が20%に減少、レベル3は26%に上昇した。レベル2は54%で変化は見られなかった(図1)。

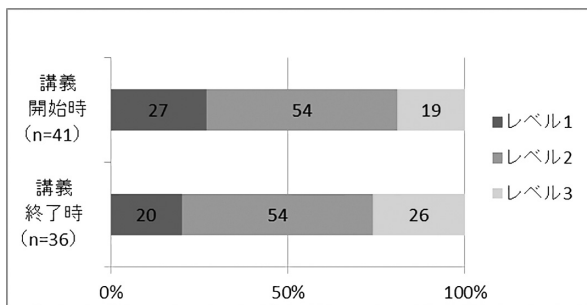


図1 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (規律性)

聴く力、質問力、コメント力を表す傾聴力は、講義開始時レベル1が35%、レベル2が65%、レベル3は0%だったが、終了時にはレベル1が20%に大きく減少し、レベル2が71%に上昇、該当者なしであったレベル3が9%となり、全体的に大幅な上昇が見受けられた(図2)。

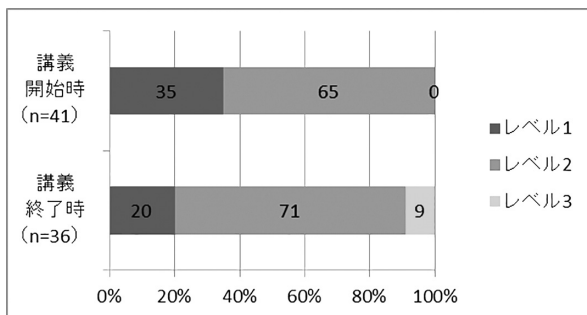


図2 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (傾聴力)

多様性、共感性、役割認識、一体感を表すフレンドシップ力は、講義開始時、レベル1が41%、レベル2が43%、レベル3が16%であったが、終了時にはレベル1が11%と大幅に減少し、レベル2が40%と微減、レベル3が49%と33%の上昇があった(図3)。

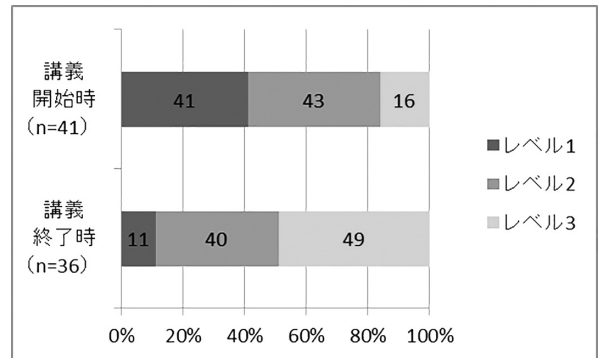


図3 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (フレンドシップ力)

また毎時間終了時に実施したミニツツペーパーでは、15回の講義内容の理解度と、主体性の程度を継続して回答する形を取った。2項目共に「十分理解できた」「十分できた」と最上位の回答をした学生が徐々に増加していく傾向が見受けられた。

6回目以降の講義は「文書の要約」をテーマにした9回目を除き、全てにおいてほぼ95%以上の学生が講義を理解し、主体性を持って行動できたと回答した(図4・5)

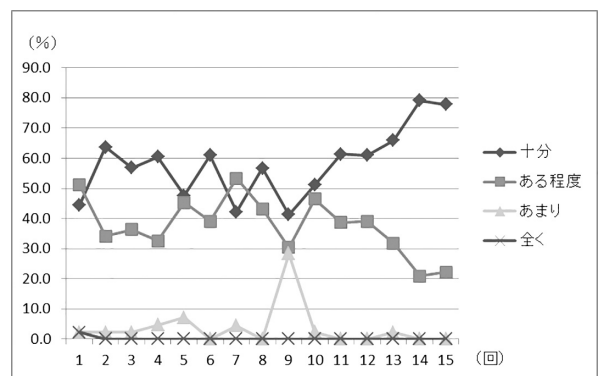


図4 講義内容の理解度の偏移

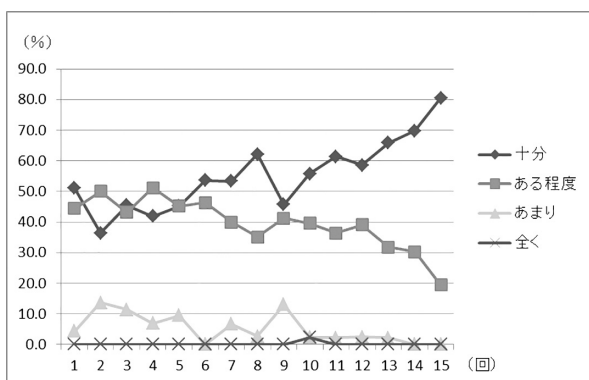


図5 主体性の偏移

「栄養学各論実習」においても学生にループリックを活用したアンケートを初回と最終授業に行った。それぞれの項目の平均値の結果、「広い視野」「情報収集力」「情報整理力」「情報分析力」の順で得点が高かった。この項目はリフレクション力8項目の内4項目であり、リフレクション力8項目の平均レベルは、講義開始時レベル2が50%、レベル3が48%であったが、講義終了時にはレベル2が20%、レベル3が80%の割合となった(図6)。

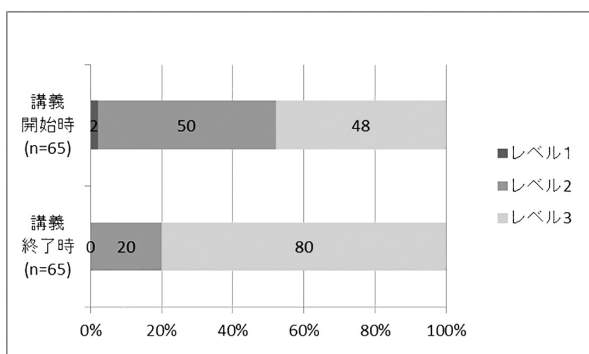


図6 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (リフレクション力)

次いで「目標設定力」「修正力」「謙虚さ」の順であった。「目標設定力」「修正力」は計画性の項目で講義開始時レベル2が52%、レベル3が45%であったが、講義終了時にはレベル2が20%、レベル3が78%の割合となった(図7)。

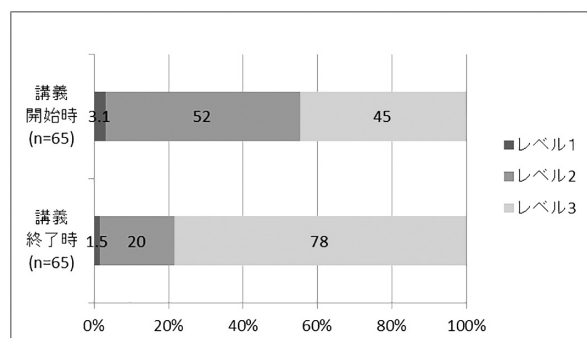


図7 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (計画性)

自由記載欄に、「情報収集力が高くなった」「毎回の授業で取り組みがあり、目標設定力や時間管理ができるようになった」「自分が理解できるよう、まとめられるようになった」等の、講義への取り組み方によって得られた学習成果として学生の意見が述べられていた。

班編成の工夫が要因と考えられる結果としては、「多様性」「共感性」「役割認識」「一体感」の項目を表すフレンドシップ力では、講義開始時レベル1と評価したものの割合が31%、レベル3では27%であった。これに対し、講義終了時にはレベル1と評価したものの割合が13%、レベル3では34%となり、フレンドシップ力に関してレベルがアップしたと感じているものの割合が増加した(図8)。

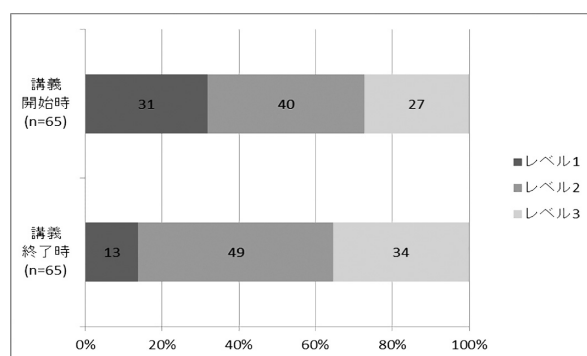


図8 講義開始時と講義終了時の各レベル割合 (フレンドシップ力)

また毎時間行った、予習課題実施状況チェックや授業姿勢チェックが要因と考えられる結果として、授業アンケートのQ2「私はこの授業を真面目に受講し、予習や復習もしっかりした」という

項目を用いて、平成27年度栄養学各論実習受講学生と比較した。平成28年度受講学生では、Q2に「そう思う」と答えた学生の割合が62%であったのに対し、平成27年度受講学生では24%となり、予習課題実施状況チェックや授業姿勢チェックを取り入れた学生のほうが事前・事後課題への取り組み姿勢が高い結果となった。

V. 考察

「日本語表現」では「規律性」「傾聴力」「フレンドシップ力」3項目いずれにおいてもレベル向上の結果となった。規律性はレベル3が7%の微増、次いで傾聴力がレベル2、3を合わせて24%上昇した。特に上昇したのは多様性、共感性、役割認識、一体感を表すフレンドシップ力であり、講義開始時から終了時までレベル3と評価した学生が33%増加した。ミニツペーパーに見られた主体性や理解度の変化においては、6回目以降、ほぼ95%以上の学生が肯定的な回答をした。このような点から、最も影響が少なかった規律性の項目に関しては、多くの学生が大学入学以前に習慣として身に付いている状況が理解できた。一方、大幅に上昇した傾聴力及びフレンドシップ力の項目に着目すると、規律性のある雰囲気の中で能動的学修に取り組むことによって傾聴力が高まり、さらには多様性の尊重、個々の役割認識や一体感を醸成することに影響を及ぼす可能性があることが確認できた。またこのような傾聴力、フレンドシップ力の高まりは、主体性や講義理解度向上に関係することが確認できた。

「栄養学各論実習」では、「広い視野」「情報収集力」「情報整理力」「情報分析力」の数値が高く、この点から、主体的に学ぶことで自己の現状を把握し、課題を発見する力や課題解決のために目標を設定し、その達成過程で現状に沿った修正を行う際に必要なリフレクション力が高まったと考えられる。

また助手が実践した班編成の工夫では、様々な学生同士の関わりを持つことで、「多様性」「共感

性」「役割認識」「一体感」を表したフレンドシップ力が高められたと考えられる。さらに学生の授業姿勢においては、授業アンケートの結果からわかるように、2年継続して同じ教員および助手が担当しているにも関わらず、事前・事後課題への取り組み状況に差が生まれたことより、予習課題実施状況チェックや授業姿勢チェックの実践等は、学生の学習に対する意欲を向上させたと考えられる。

上記のように今回、異なる立場にある教員が、それぞれの対象者にAL型授業を実践した。

この実践を通じて、高等学校まで受動的な姿勢で多くの授業を受けてきた学生にとって、段階的に能動的学修を行うことは、高等学校から大学教育へ移行する上で、有意義であると考えられる。まず1年前期に開講する基礎教育科目における能動的学修を通じて、知識の習得だけでなく、学びの基本的姿勢である規律性の現状を再確認しながら、さらに傾聴力、フレンドシップ力等を高め、学習者としての態度や人間的成長をもたらす。この成長を土台にして、2年次では、より主体性が求められる専門科目の学びの中で、専門科目担教員及び助手等、複数の教員が同じ視点を持ちながらAL型授業の運営にあたり、学生間及び学生教員間の相互作用を活性化することで、自己の考えを構築する過程を体験し、修正を加えながら次の学びにつなげていく、リフレクション力の高まりが見られた。AL型授業を通じて、さらなる学びを醸成できる可能性があることが示されたのである。このような点から、複数の教員が連携した能動的学修の計画構築および授業運営は学習効果に影響を与えたと考えられる。

VI. 今後の課題

幾つかの教育的効果が得られた一方で、限界と課題がある。まず限定された教員と科目であるため、学部教育の一部の現状しか把握されていない。今後はさらに多くの教員が組織的に連携して、栄養士養成課程全体における授業の中で、能動的学修が効果的であるか否かを明らかにする必

要がある。次に調査時期が4月から8月までの前期間に1、2年生を対象として行われたため、1年次の取り組み方が2年次のAL型授業にどのような影響を及ぼしているかが不明である。短期大学の2年間の学びにおけるAL型授業の効果を明らかにするためにも、今後継続的に学習態度と学習効果を測定し、2年間を通じた学びと成長にどのような変化がみられるかを調査することが課題である。また現行の学習指導要領では、知識や技能を活用して課題解決に必要な『思考力・判断力・表現力の育成』をすることが重視されており、これらはAL型授業の主な目的となっている。そしてこの目的が達成されているか否かを見極めるためには、従来の筆記テストとは異なり、客観的な評価が難しいAL型授業の厳密な評価方法を確立させることが必要である。今後さらなるAL型授業導入の際、本学にふさわしいどのような評価が適切かを、検討する点も課題である。

[引用文献]

- 1) 中央教育審議会平成24年8月28日答申新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
- 2) 林徳治、谷口勝一：“大学授業におけるアクティブラーニングの教育実践（4）－大学教員を対象としたFD研修－”，日本教育情報学会第26回年回，pp.194-197, 2010
- 3) 武田正則：“アクティブラーニング推進のためのFD研修会における課題”，日本教育情報学会第31回論文集（31），pp.82-85, 2015
- 4) 文部科学省用語集
- 5) 小栗雅子：“学生が主体的に学ぶための教育展開”，中京学院大学中京短期大学部研究紀要，46（1），pp.53-58, 2015

[参考文献]

- 1) 大橋健治、天野緑郎：“内省をうながす授業－アクティブ・ラーニング再考－”，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要，10，pp.203-215, 2015
- 2) 小山理子：“短期大学におけるアクティブラーニング型授業の学習成果に及ぼす影響の分析－講義型授業の取り組み方に注目して－”，京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要 53，pp.153-164, 2015

「真剣味」を具現化する「4つの力と11の要素」ルーブリック

4つの力	11の要素・定義	項目	レベル1(基礎)	レベル2(応用)	レベル3(発展)
思考力	リフレクション力 広い視野を持ち様々な情報を取捨選択することで社会や自己の現状を把握し、課題を発見する力	<ul style="list-style-type: none"> ・素直さ ・謙虚さ ・広い視野 ・情報収集力 ・情報整理力 ・情報分析力 ・判断力 ・自己評価力 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット、新聞、書籍等から様々な情報収集をする手段を理解している。 ・情報を活用して、自分自身や社会の現状把握しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット、新聞、書籍等から様々な情報収集をすることができる。 ・情報を活用して、自分自身や社会の現状把握をすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット、新聞等から様々な情報を収集し、取捨選択することができる。 ・情報を活用して、自分自身や社会の課題を把握することができる。
	計画性 様々な課題を解決するために目標設定と計画立案し、現状に沿って臨機応変に計画を修正して行く力	<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定力 ・時間管理能力 ・修正力 	様々な課題を解決するための目標設定と計画立案の手順を理解している。	様々な課題を解決するための目標設定と計画立案が、手順に沿って円滑にでき、それを実行することができる。	様々な課題を解決するための目標設定と計画立案が、手順に沿って円滑にでき、それを着実に実行し、臨機応変に修正することができる。
	創造力 柔軟な発想で新たな考えや方法、価値観を生み出す力	<ul style="list-style-type: none"> ・柔軟な発想力 ・洞察力 ・フロンティア精神 	新しいものを創り出すことを意識しながら、様々な視点で物事を見つめ、アイデアやヒントを積極的に探そうとしている。	新しいものを創り出すことを常に意識しながら、様々な視点で物事を見つめ、複数の情報を組み合わせることで物事を考えることができる。	新しいものを創り出すことを常に意識しながら、様々な視点で物事を見つめ、複数の情報を組み合わせ、新しいものを創り出すことができる。
行動力	挑戦力 健康な体を基本として、前向きに物事を捉え、考えや思いを確実に行動に移す力	<ul style="list-style-type: none"> ・健康 ・体力 ・ポジティブ思考 ・決断力 ・実行力 	<ul style="list-style-type: none"> ・規則正しい生活を心掛け、健康保持に努めている。 ・積極的に行動し、何事にも挑戦しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・規則正しい生活を継続し、健康を保持することができる。 ・積極的に行動し、何事にも挑戦する中で、多くの気付きを得ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・規則正しい生活習慣が確立され、健康保持と増進を図ることができる。 ・積極的に行動し、何事にも挑戦する中で、多くの気付きを得、目標に向かい常に努力することができる。
	貫徹力 行動に移したしことを最後まで諦めずにやり通す力	<ul style="list-style-type: none"> ・忍耐力 ・妥協しない力 ・完遂力 	諦めずに最後まで取り組む中で、多くの学びがあることを知り、目標達成を目指して行動しようとしている。	諦めずに最後まで取り組む中で、我慢することの大切さを知り、常に目標達成を目指して行動することができる。	諦めずに最後まで取り組む中で、我慢することの大切さや自分の弱さを知り、常に目標達成を目指して行動し、やり遂げることができる。
コミュニケーション力	規律性 基本的な生活習慣が身に付き、ルールやマナーを守る力	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な生活習慣 ・礼節 ・道徳観 ・倫理観 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶・言葉遣い等の礼儀作法が身に付き、身の回りの整理整頓ができる。 ・ルールや時間を守り、学内で周囲に迷惑を掛けることがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・心をこめた挨拶・言葉遣い等の礼儀作法が身に付き、周囲を配慮した整理整頓ができる。 ・ルールを守り、時間、期限に余裕を持った行動をし、公共の場で周囲に迷惑を掛けることがない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その場に相応しい挨拶・言葉遣い等の礼儀作法が身に付き、何事にも周囲を配慮して行動することができる。 ・ルールを守り、時間を有効に活用し、公共の場で周囲に注意を促すことができる。
	傾聴力 他者の話に耳を傾け、真摯な姿勢で聞く力	<ul style="list-style-type: none"> ・聴く力 ・質問力 ・コメント力 	話し手の目を見て姿勢を正して静かに聞き、話の内容をできる限り理解しようとしている。 (「聞く」段階)	話し手の目を見て姿勢を正して適切なうなずきとメモを取りながら注意深く聞き、話の内容を理解している。 (「聴く」段階)	話の要点を捉えながら集中して聞き、質問を投げかけることで新たな気づきを得て、自己の課題の克服に努めることができる。 (「訊く」段階)
	表現力 様々な表現方法を用いて、自分の考えや思いを正確に相手に伝える力	<ul style="list-style-type: none"> ・言語表現力 ・非言語表現力 ・プレゼンテーション力 ・ディスカッション力 ・ICT活用能力 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の考えや意見を分かり易く内容を整理して伝えようとしている。 ・様々な表現方法があることや、それぞれの効果を知っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の考えや意見を分かり易く要点を整理して伝えることができる。 ・様々な表現方法を使いながら伝えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の考えや意見を分かり易く要点を整理した上で、非言語表現も意識しながら心を込めて伝えることができる。 ・様々な表現方法を場面に応じて効果的に使い分け、伝えることができる。
	フレンドシップ力 他者を敬い、状況に応じて周囲と協力しながら物事を推進する力	<ul style="list-style-type: none"> ・多様性 ・共感性 ・役割認識 ・一体感 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の言動に関心を持ち、良い面を捉えて行動しようとしている。 ・集団内での自分の役割を考え、協力しながら行動しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の言動の理解に努め、尊重しながら行動することができる。 ・集団内での自分の役割を認識し、協力しながら行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・常に他者の言動や価値観の理解に努め、尊重しながら行動することができる。 ・集団内での自分の役割を認識し、状況に応じて協力しながら行動することができる。
セルフモチベーション力	主体性 向上心、責任感、使命感を持ち、自ら進んで物事を行う力	<ul style="list-style-type: none"> ・向上心 ・責任感 ・使命感 ・リーダーシップ 	<ul style="list-style-type: none"> ・何事にも興味や関心を持ち、自分のやるべきことを見出そうとしている。 ・失敗を生かし創意工夫しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何事にも興味や関心を持ち、自分のやるべきことを見出し、責任感を持って行動している。 ・失敗を生かし創意工夫することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何事にも興味や関心を持ち、自分のやるべきことを見出し、やりがいと誇りを持って行動することができる。 ・失敗を生かし常に創意工夫することができる。
	まごころ力 自分自身や人間の生きる意味の尊さに気付き、奉仕の精神と他者への愛情を持って行動する力	<ul style="list-style-type: none"> ・奉仕の精神 ・共存共栄の心 ・動物愛 ・自然愛 ・地球愛 ・人間愛 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然や動物と触れ合い、自然が人間に多くの恩恵を与えていることを知り、命の尊さを感じている。 ・ボランティア活動に取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然・動物・人間それぞれの視野に立って物事を考え、共存共栄の大切さを知り、生きることを意味を理解しようとしている。 ・ボランティア活動に進んで取り組むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地球規模の大きな視野に立って物事を考え、生きることの喜びや素晴らしさの理解に努めている。 ・誰かのため、何かのために主体的に行動することができる。